

# 命名の認知言語学的分析に関する試論

## - 地域の名称をケース・スタディとして -

橋本 学

### 1. はじめに

地名・人名といった固有名詞について研究する言語学の下位領域は固有名詞学<sup>1)</sup>と呼ばれている。固有名詞学は従来、言語学の研究テーマとして、かなり傍流に属するものと見做され続けてきた。しかし、実は、そのような等閑視を正当化する論理的な根拠はない。

本稿では、橋本(2008)が対象としていた地名だけではなく、地域で用いられている様々な種類の名称に分析を広げ、それらの音形と意味の間に認知的必然性が存在すること<sup>2)</sup>、更に、固有名詞学が認知言語学の観点から十二分に検証に耐えうる、興味深い研究領域であることを主張する。

次節では、主に東北を中心とする地域で使われている地名や人名以外の名称を下位分類しながら、その具体例を紹介していく。続く第3節では、そうした名称の背後にどのような認知的動機付けが存在しているのかを分析していく。最終節は、本稿で述べた内容を纏めた上で、今後の

1)「固有名詞学/論」は *onomastics* の訳語であるが、この訳以外にも、「名称学/論」や「命名学/論」といった訳が存在し、使用されている。鏡味(1991)は、「固有名詞」を「人名」(及び団体名・商号・元号・民族名など人名性を持つ名)と「地名」(及び建造物名・施設名など地名性を持つ名)に限定して捉えている。また、固有名詞を「名称」、それらを対象とする研究を「名称学」と呼んでいる。一方、固有名詞を含めた全ての命名行為に関する研究を「命名学/論」と呼んで、区別すべきであると述べている。しかし、城生(1991)が指摘しているように、固有名詞と普通名詞を峻別する判断基準を立てることは困難である。本稿では、鏡味(1991)の言う「命名学/論」の広い視野で考察を進める。

2)この認知的必然性の度合いに関しては、固有名詞の下位範疇間で差が見られる。一般的に言って、地名は固有名詞の中で認知的必然性の度合いが最も高い。

研究の方向性についても若干の考察を加える。

## 2. 地域で用いられている名称

本節では、地域で用いられている名称の実例を、下位分類した上で、紹介していく。

下位分類については、便宜的に、意味カテゴリーの基準で分類する。

2. 1. 節では「寺社・仏閣・神聖な土地、神事・祭事など」、2. 2. 節では「産物・商品・地場産業など」、2. 3. 節では「店舗・公共施設など」、2. 4. 節では、「学校関係など」という順で紹介する。

### 2. 1. 寺社・仏閣・神聖な土地、神事・祭事など

このカテゴリーに属する具体例は、以下のように、「a. 地元の寺社・仏閣・神聖な土地等」と「b. 地元の神事・祭事等」に大別できる。

- (1) a. 「鵜鳥（うねどり）さま」（鵜鳥神社，岩手県・普代村），「八幡さま」，「塩釜さま／さん」，「月山さま」，「おにようさま」（寺），「弁天さま」（栃木県佐野市出流原（いずるはら）の弁天池，名水百選），「男神・女神」（岩手県二戸市馬仙峡の男神岩・女神岩）
- b. 「お神楽」，「おししさま」，「二十三夜さま」（岩手県東北～青森県下北地方）旧暦二十三日の月の出を拜んで，その年の作柄を占う行事），「輪くぐりさん」（全国の寺社で行われている「茅の輪くぐり」。正月から半年間の罪穢れを祓うため6月から7月にかけて，夏越しの大祓えで執り行われ，茅草で作られた大きな輪をくぐると疫病や罪が祓われる。）

### 2. 2. 産物・商品・地場産業など

このカテゴリーは「a. その土地の農産物・水産物等」，「b. 加工食品な

どの商品、名産品等」と「c. その土地の地場産業に関する事物」に分けられ、具体例としては、以下のようなものが挙げられる。

- (2) a. 「坊主かぜ」(えぞばふんうに、棘が短い)、「馬面(うまづら)」  
(フグ目カワハギ科の一種)
- b. 「へっちょこ団子」(岩手県二戸市他)、「ぶぢょうほまんじゅう」  
(盛岡)、「笹かま」(笹かまぼこ)、「じゃじゃ」(じゃじゃ麺)、  
「べごっこ」, 「水っこ, 飴っこ」(青森県下北地方)
- c. 「お蚕さん」, 「とどっこ(=蚕)さま」(岩手県県北地方)

### 2.3. 店舗・公共施設など

このカテゴリーに属する具体例は、以下のように、「a. 地域の店舗等」と「b. 地域の公共施設等」に分類できる。

- (3) a. 「八食」(八食センター)、「前ジャス」(前沢ジャスコ)、「多賀ジャス」,  
(多賀城ジャスコ)、「民オン」(洺民イオン)、「南ジャ」(酒田南ジャスコ)、「岩銀(いわぎん)」, 「盛食(もりしょく)」(盛岡食堂)、「アネカワ」(アネックス川徳)、「タケスポ」(タケダスポーツ)、「イービン」(E BeanS(イービーンズ))、「岩(がん)クス」⇔「4(よん)クス」(サンクス, 盛岡)、「山(やま)ドン・海(うみ)ドン」(びっくりドンキー, 函館)、「ブルーマウンテン」(青山食堂)、「ヘッチョ仕出し店」(青森県平川市碓ヶ関)、「ガリモリ」(青森県おいらせ町の焼きそば屋)
- b. 「ほんばち」(本八戸駅)⇔「はちえき」(八戸駅)、「みなせん」(南仙台駅)、「ちょめ」(四丁目公園)、「グル公」(西中田中央公園, グルグル公園とも呼ぶ)、「ナイキ橋」(盛岡南大橋)

### 2.4. 学校関係など

このカテゴリーは「a-c. 小学校・中学校・高等学校・専門学校・大学,

大学の学部・学科，研究所・センター等]，「d-e. 友達や先生のあだ名等」と「f. 学校関連の事物等」に分けられ，具体例としては，以下のようなものが挙げられる。

- (4) a. 「北中 (ほくちゅう, 北上中学校)」⇔「ペペ中 (北上北中学校)」，  
「北中 / 矢北」(矢巾北中学校)，「平中」(平鹿中学校)
- b. 「水高 (みずこう, 水沢高校)」⇔「水工 (すいこう, 水沢工業高校)」，  
「弘高 (ひろたか, 弘前高校)」⇔「弘工 (ひろこう, 弘前工業  
高校)」，「一高, 二高, 三高, 四高 (しこう)」，「ガッタ」(大曲  
高校)
- c. 「岩大」，「おうせい」(応用生物科学科)，「トンペー」(東北大学)，  
「盛 (もり) ジョビ」(盛岡情報ビジネス専門学校)，「寒バイ」  
(岩手大学寒冷バイオマス研究センター)
- d. 「スネ夫・ジャイアン」(友達のあだ名)
- e. 「たけ T (ていー)」(武内先生)
- f. 「ジャス」(仙台, ジャージスーツ (上下揃っていないと, こう  
呼ばない, 上または下だけなら「ジャージ」と呼ぶ。))

### 3. 形態論及び認知言語学の視点からの分析

本節では前節で紹介したデータを，形態論や認知言語学の観点から分析していく。3.1. 節で形態論の視点からの分析を，3.2. 節では認知言語学の視点からの分析を行う。

#### 3.1. 形態論の視点からの分析

第2節で紹介したデータは全て，何らかの形態操作によって造語されてできているという共通点を持っている。本節では，どのような語形成のタイプが用いられているかを具体例に沿って分析する。

### 3. 1. 1. 接辞付加 (affixation)

前節(1)で挙げた例は、次のような尊敬や丁寧を表す接辞 /affix(接頭辞 /prefix, 接尾辞 /suffix, 接周辞 /circumfix)が付加された派生語 / derived word になっている。こうした派生語によって、地元の人々の対象に対する愛着感や敬意が無意識に表現されている。

- (5) a. 「お \_\_\_\_\_」(例. お神楽)  
b. 「\_\_\_\_\_ さま」(例. 二十三夜さま)  
c. 「お \_\_\_\_\_ さま」(例. おにようさま)  
d. 「(お) \_\_\_\_\_ さん」(例. お蚕さん, 輪くぐりさん)

接辞付加の下位カテゴリーとして指小辞 (diminutive) の付加を挙げることができる。指小辞の例としては、(2b)で挙げた、「べごっこ、水っこ、鉛っこ」などがある。これらの例では、「\_\_こ」という指小辞が付加されることによって、その対象に対する親近感が表わされている。この点で、指小辞の使用は、3. 2. 1. 節で論じるエンパシーを表す有効な手段の一つであると言える。

「\_\_こ」という指小辞は、青森県だけに限らず、東北地方を中心に広く使用されている。いくつか例を挙げておこう。

- (6) 童っこ / わらすこ, わんこ, 根っこ, 端っこ, どじょっこ, ふなっこ...

なお、日本語の指小接尾辞で主要なものは「\_\_こ」ぐらいしかないが、英語の指小接尾辞は種類が豊富である。

- (7) a. *-let*: 'piglet, booklet'  
b. *-et*: 'cabinet (← cabin)'  
c. *-ette* 'cigarette (← cigar)'  
d. *-ling*: 'duckling'

e. -y: 'mammy, daddy'

### 3. 1. 2. 省略 (clipping)

省略 (clipping) は短縮 (shortening) の一種であり, その結果, 生成される語のことを省略語 (clipped word) / 切株語 (stump word) と呼んでいる。

省略の入力となる語根は, 単純語と複合語の二つのケースがある。なお, これ以降, 見やすさを優先し, 省略する部分ではなく, 残っている部分に下線を引いていく。

(8) a. 単純語を省略した典型例: [マクドナルド] ⇒ 「マクド」(近畿地方)

b. 複合語を省略した典型例: [岩手+大学] ⇒ 「岩大 (がんだい)」

省略語には(8)のように, 語頭を残すタイプが多いのだが, これは, 語頭を残すことによって元の語を想起しやすくするという人間の記憶メカニズムが背後で働くためである(cf. 窪蘭 (2008) 参照)。

更に, 省略語のタイプは大別すると, 語の中のどの部分が省略されているかによって, 下記の三つのタイプに分かれる。

(9) a. 後部が省略され, 頭部が残っているタイプ。このタイプが最も多い。

b. 頭部が省略され, 後部が残っているタイプ。

c. 頭部と後部が省略され, 中部が残っているタイプ。

このタイプが最も少ない。

省略語の使用割合が, (9a) > (9b) > (9c) の順であるのは, 上で述べた記憶メカニズムとの関連で, 省略された結果の残存部位が, 頭部 > 後部 > 中部の順で, 聞き手 / 読み手にとって元の語を復元しやすくなる

ことを直接的に反映しているものと推察できる。

前節で挙げた例の中では、(2)-(4)のかかなりの例が省略によって生成されている。そこで、(2)-(4)の個々の例を(9)のタイプ毎に分析してみよう。

まず、(9a)のタイプと考えられるのは以下の例である。

- (10) a. 単純語: [じゃじゃ麵] ⇒ 「じゃじゃ」, [八食センター] ⇒ 「八食」  
b. 複合語: [盛岡+食堂] ⇒ 「盛食」, [アネックス+川徳] ⇒ 「アネカワ」, [タケダ+スポーツ] ⇒ 「タケスポ」, [イー+ビーンズ] ⇒ 「イービン」, [南仙台 (みなみせんだい) + 駅] ⇒ 「みなせん」
- (11) [本+八戸駅] ⇔ 「ほんぱち」 ⇔ 「はちえき」 ⇔ 「八戸+駅」

(10b)の「イービン」に関しては、後ろの語根「ビン」は(9a)の標準的なパターンで省略されているが、前の語根「イー」が全く省略されていないという点で注目に値する。また、大抵の複合語では右側主要部規則(Right-hand Head Rule)が適応されるので、いくら後部とはいえども普通は省略しないのだが、「みなせん」と「ほんぱち」の例では、右側主要部である「駅」が省略されており、地元に住む人々にしか解らない符牒めいたものになっている。(11)の例では、市内に二つある紛らわしい名称の駅を弁別するために、最適な省略を無意識に行っていることがわかる。

次に、(9b)のタイプの例を挙げてみる。

- (12) a. [洪民+イオン] ⇒ 「民オン」  
b. [酒田南+ジャスコ] ⇒ 「南ジャ」  
c. [四丁目 (よんちょうめ) +公園] ⇒ 「ちよめ」  
d. [寒冷バイオマス研究センター] ⇒ 「寒バイ」

(12a)が示すように前後両方の語根の頭部が残っていない「民オン」の

方が、(12b)が示すように後ろの語根の頭部が残っている「南ジャ」よりも、聞き手/読み手が元の語を想起できる可能性が低いので、地元の人々にとっての符牒性は高いと言えるだろう。更に、(12c)の「ちよめ」や(12d)の「寒パイ」の省略度は「みなせん」・「ほんぱち」や「民オン」以上に符牒性が強いと言える。しかし、見方を変えれば、その公園で日常的に遊んでいる地元の子供たちやセンターを利用している岩大生にとっては、これ以上しっくりとくる名称はないのではないだろうか。

- (13) a. [岩手大学前にある：サンクス] ⇔ 「岩クス」 ⇔  
 [(国道) 4号線沿いにある：サンクス] ⇔ 「4クス」  
 b. [海沿いの道にある：びっくりドンキー] ⇔ 「海ドン」 ⇔  
 [山の手にある：びっくりドンキー] ⇔ 「山ドン」

(13)は今までの例の中で、元の語(正確には名詞句)の想起可能性が最も低い例である。特に、「岩クス」や「4クス」は岩大の学生や教職員でなければ、「海ドン」や「山ドン」は函館在住者でなければ、聞いてもわからない人が大部分である。特に、後者の「海ドン、山ドン」を初めて聞いた者は、「海産物の井物、キノコや山菜などの山の幸がのった井物」と解釈してしまう。しかし、それぞれの省略形は、話し手が二つのサンクス、二つのびっくりドンキーの内、どちらに言及しているのかを聞き手に伝える弁別機能をもっている点が重要である。弁別機能という点で、次に挙げる例についても考察してみよう。

- (14) a. 「北中(きたちゅう, 町内出身者) / 矢北(やきた, 町外出身者)」  
 (矢巾 北 中学校)  
 b. 「水高(みずこう)」(水沢高校) ⇔  
 「水工(すいこう)」(水沢工業高校)  
 c. 「弘高(ひろたか)」(弘前高校) ⇔  
 「弘工(ひろこう)」(弘前工業高校)

(14a)では町内出身者のほうが、この中学校に対するエンパシーが高く、矢巾であることは前提にして、東西南北の部分に焦点を当てて表現している。

(14b)と(14c)は、省略のパターンがどちらも(9a)で同じになってしまうので、音読み・訓読みの発音の組み合わせを工夫して差別化を図り、固有名詞の弁別機能を効率的に果たしている。

なお、(1)－(4)で紹介した例の中には(9c)のタイプは無かったが、継続して調査する必要がある。

### 3.2. 認知言語学の視点からの分析

前節では、第2節で紹介した名称が何らかの形態操作によって生成されていることを観察した。本節では、何故、そのような語形成がなされるのか、その背景にある認知的動機づけについて考察してみよう。

#### 3.2.1. エンパシーと地域の呼称

大部分の例に関与していると考えられるのが、次に挙げるエンパシーの概念である。<sup>3)</sup>

(15) エンパシー＝その対象に対して無意識的に感じている心理的な距離感

(16) 「お東さん」, 「お西さん」

例として(16)を挙げたが、これは京都の人々が東本願寺や西本願寺に対して日常的に感じている強いエンパシーが反映されているものと考えられる。

(16) 同様、(1)－(4)で挙げた諸例もエンパシーを反映した表現とみ

---

3) エンパシーという用語は、元々は心理学の分野で「共感(力)」の意で用いられていたものである。Kuno (1987) は、エンパシーが様々な文法現象の背後に働いていることを論じている。

なすことができる。場合によっては、(1)の例のように、同時に対象への敬意も含まれている。(16)は人ではない対象の例であったが、次のように人に対するエンパシー(+敬意)を表している例も見られる。

(17) 「おっぴちゃん/さん」(宮城, 曾祖父・曾祖母のこと)

日本人のエンパシーに関して、定延(1999)は次に挙げる趣旨の傾向があることを指摘している。

(18) 日本人は民族や国家の観点で、エンパシーを測る傾向があって、日本人/日本の事物は近く、外国人/海外の事物は遠いという遠近感覚を持ちやすい。

このエンパシーの傾向によって、(19a)が示しているように、日本人が命名する怪獣・怪人の名前は、外国人の名前(この場合、正確には family name)である場合が圧倒的に多い。それゆえ、(19b)のような表現は非文となるのである。

(19) a. 「スペクター, バルタン星人, ゴルドン, ウィンダム, …」  
b. \*ハシモトが火を吹いてビルを燃やした

地元の人々が使う(1)–(4)で挙げた諸例においても、元の語がカタカナ語を含んでいる場合を除けば、わざわざ外国語に訳して表現している例はほとんどない。少なくとも日本人のエンパシーに関する深層心理に(18)のような傾向があるという仮説は妥当であろう。但し、以下のような例外もみられる。

(20) a. [青山食堂] ⇒ (9a)省略 ⇒ 「青山」 ⇒ 「ブルーマウンテン」  
b. [武内先生] ⇒ [武内ティーチャー] ⇒ 「たけ T (ていー)」

c. [北上北中学校] ⇒ 「ペ ペ 中」, [東北大学] ⇒ 「トン ペー」,

(20a)は主要部の省略と前の語根のカタカナ語訳の二つのプロセスから成り、かなり強いエンパシーを感じさせる面白い例である。(20b)では「先生」をいったんカタカナ語である「ティーチャー」に訳してから、(20c)でも北や東を表す中国語に訳した上で、省略の語形成で名称をつくっている。後者は、マージャンが昔の男子学生にとって今よりもずっと身近な娯楽であった時代に、「東西南北＝トン・ナン・シャー・ペー」のような言葉を参照して造語されたものなのである。

日本人が多くの語彙カテゴリーでなぜ外来語やカタカナ語をかくも頻繁に使いたがる傾向があるのかという問題については、柳父(1976)の指摘する「カセット効果」などの観点から別途、詳しく論じる必要があるが、本稿の主題ではないのでこれ以上、立ち入らない。

### 3. 2. 2. 比喩表現

本節では、(1) - (4)の例の中で、前節で分析したエンパシーを比喩表現の効果的な利用で表現しているものについて考察する。

#### 3. 2. 2. 1. メタファーの利用

まず、「人生は旅だ / Life is a journey.」の例に表れているような、類似性に基づく意味の拡張であるメタファーであると考えられる例から分析を始める。

- (21) a. 「男神・女神」  
b. 「坊主かぜ」  
c. 「へっちょこ団子」  
d. 「へっちょ仕出し店」

(21a)の例は、地元で敬われている岩を神のような存在に喩えている点でメタファーであるし、一方の大きな岩の姿を男に喩え、他方の小ぶりな岩の方を女に喩えている点でもメタファーであると言える。(21b)は、棘が短い「えぞばふんうに」の表皮に焦点を当てて認知し、人間の坊主頭に喩えている。「かぜ」は方言で「うに」を指し、メタファーではないが、聞くものに強いエンパシーを感じさせ、メタファーとの相乗効果が出ている。

(21c)の「へっちょこ」は「へそ」の意の方言である。団子の真ん中をへそ状に窪ませて作ってあるので、この名称が付いている。(21d)の「ヘッチョ」も「へそ」を意味するが、こちらの方は、地理的に見てこの店のある碓ヶ関が青森県の中心部に当たっているという認識に立ち、人間の体の中心にあると一般的に見做されている「へそ」に喩えたメタファーである。

(21b-d)の例は、いずれも、メタファーと方言を巧みに組み合わせた名称であり、親しみやすさと、そこはかたないユーモアを醸し出している。

### 3.2.2.2. メトニミーの利用

「手 / 頭数が足りない」の例に見られるような、関連性・近接性に基づく意味の拡張であるメトニミーの具体例として以下のようなものが挙げられる。

(22) a. 「おにようさま」

b. 「二十三夜さま」：岩手県県北から青森県下北地方にかけて、旧暦二十三日の月の出を拝んで、その年の作柄を占う行事。

c. 「輪くぐりさん」：全国の寺社で行われている「茅の輪くぐり」。正月から半年間の罪穢れを祓うため6月～7月にかけて、夏越しの大祓えで執り行われ、茅草で作られた大きな輪をくぐると疫病や罪が祓われる。

d. 「グル公」(西中田中央公園, グルグル公園とも言う。)

(22a) の場合, 地元民はその寺と言えは真っ先に仁王像を想起するので, 逆に, 仁王像という参照点(reference point)を表示するだけで, ターゲット(target)である「その特定のお寺」にアクセスすることが可能になるのである(この種の能力を Langacker(2008)は「参照点能力」と呼んでいる)。

(22b)は, 当該の行事を開催する「二十三夜」という時候を参照点にして, ターゲットである, 当該行事全体を表現している。

(22c)では, 「輪くぐり」という参拝者の動作を参焦点にして, その動作によって罪穢れを祓う厄除け全体を指している。

(22d)の「グル公」は, この公園で遊ぶ子供たちが, 数ある公園遊具の中で「回転ジャングル」を参照点にしてターゲットである公園全体を指示している。そのようなメトニミーの利用に加えて, 「省略」も適用することによって, この名称のエンパシー度が益々高まっている。

### 3. 2. 2. 3. メトニミーとメタファーの複合的利用

(1)–(4)で提示した例の中には, メトニミーとメタファーを複合的に利用した, ユニークな名称も観察される。

(23) a. 「馬面 (うまづら)」(フグ目カワハギ科の一種)

b. 「ナイキ橋」(盛岡南大橋)

(23a)を分析すると, 当該の「魚の顔の特徴」で「魚全体」を指示しているので, この側面は“部分で全体”を表すメトニミーである。その「魚の顔の特徴」が「馬のそれ(馬面)に」類似していると捉え, 前者を後者で喩えているので, この側面は馬の顔との類似に基づくメタファーとなっている。

(23b)では、「橋の一部である欄干」で「橋全体」を代表させている点は、メトニミーを利用している。また、「欄干に付いているモチーフの形」が「ナイキのロゴマーク」に似て見えるので、前者を後者に喩えている点は、メタファーを利用している。

ちなみに、Goossens(1995)は、メトニミーとメタファーが相互作用している比喩表現のことを「メタフトニミー(metaphonymy)」と呼んでいる。

#### 3.2.2.4. オノマトペの利用

(3a)と(4b)で紹介した下記の例はとてもユニークであるが、初めて聞いた地元以外の人には、いったい何のことだろうと首をかしげってしまうような名称である。

(24) a. 「ガリモリ」(青森県おいらせ町の焼きそば屋)

b. 「ガッタ」(大曲高校)

(24a)は、店の主人が焼きそばをヘラを使って鉄板の上で「ガリガリ」と音を立てては皿にどっさりと盛りつけていく様を活写している。このようにオノマトペを上手く活用していなければ、これほどの臨場感あふれる名称は誕生していなかったであろう。(24b)の語源には諸説あるが、最も有力なものは、以下のようなプロセスで命名されたとするユーモラスな説である。

(25) 「校舎が相当に古い」⇒「風や振動で始終ガタガタと音がする」⇒「ガッタ」

#### 3.2.2.5. 方言の利用

名称のエンパシー度を高めるのに、方言の利用はとても有効である。ここまでの議論の中で既に紹介した「おっぴちゃん/さん」,「坊主かぜ」

や「へっちょこ団子/へっちょ仕出し店」以外にも、再掲する次のような例がある。

(26) 「ぶちょうほまんじゅう」(盛岡)

(26)の饅頭は、「きりせんしょのような生地の一口呆まんじゅうに、たっぷりの黒蜜が入った盛岡名物のひとつ。上にのったくろみが香ばしく、つい何個も食べてしまうという魔力をもつ。一口で食べてしまわないと黒蜜が服にたれたり、飛び出して人にかかったりするなど、「不調法」になってしまうことからこの名がついたという。」(大森 2007 より引用)つまり、「ぶちょうほう」が訛って「ぶちょうほ(或いは「ぶぢょほ」と発音される)」になったという訳である。

#### 4. おわりに

本稿では、先ず、主に東北を中心とする地域で使われている地域の名称を下位分類しながら、それぞれの具体例を紹介した。次に、そうした名称がどのような語形成のプロセスで生成されているかを明らかにした。地域で使われている名称は、語形成の種類の場合で言えば、「省略」によって生成されているものが最も多く、「指小辞」を含む「接辞付加」によって生成されているものも多かった。更に、地域で使用されている名称の背後にどのような認知的動機付けが働いているのかを詳細に分析した。その結果、「エンパシー」を中心として、「エンパシー」を喚起する「メタファー・メトニミー・メタフトニミー」, 「オノマトペ」や方言語彙の豊かな使用が明らかになった。

今後の課題としては、今回収集した名称のデータは種類の点でも、数の点でも、網羅的ではなかったので、その点を補ってゆく必要がある。例えば、人名・あだ名・屋号・社名など、今回は意図的に取り上げなかつ

たカテゴリーについてもデータを収集していく必要がある(田中(1996)を参照のこと)。また、地域の名称の中に今回は見つけることができなかった種類の語形成の手段、例えば、混成語(blend)や頭字語(acronym)のプロセスを含むものが本当にはないのか、更に探索し、考察を深めていこうと考えている。

## 参考文献

- 大石 強 (1988) 『形態論』, 開拓社, 東京.
- 大森不二夫 (2007) 『ずっぱり岩手』, 熊谷印刷出版部, 盛岡.
- 鏡味明克 (1991) 「名称学と命名論」, 『日本語学』 Vol.31-1, 明治書院, 東京.
- 窪藪晴夫 (2008) 『ネーミングの言語学』, 開拓者, 東京.
- 定延利之 (1999) 『よくわかる言語学』, アルク, 東京.
- 城生佰太郎 (1991) 「命名を考える」, 『日本語学』 Vol.31-1, 明治書院, 東京.
- 田中克彦 (1996) 『名前と人間』, 岩波書店, 東京.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開』, 研究社, 東京.
- 辻 幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』, 研究社
- 橋本学 (2008) 「名称論への学際的アプローチ-地名研究をケース・スタディとして-」, 『言語と文化・文学の諸相-岡田仁教授・笹尾道子教授退任記念論文集-』 (2008) 所収, pp.287-306.
- 柳父 章 (1976) 『翻訳とは何か』, 法政大学出版局, 東京.
- 山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』, 開拓社, 東京.
- Goossens, L. (1995) "Metaphonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Figurative Expressions for Linguistic Action," in *By Word of Mouth*, by Louis Goossens (et.al.), pp.159-174, John Benjamins, Amsterdam.
- Kuno, S. (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse, and Empathy*, University of Chicago Press, Chicago.

Langacker, R. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*,  
Oxford University Press, New York.